The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	異言語話者間のミスコミュニケーションの原因研究
Author(s)	柴田, 惇朗
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　人間科学部
採択番号　　No.2

平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	しばた　じゅんろう 柴田　惇朗	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3　　年
ふりがな 共　同 研究者名		学部 学科		学年	年
					年
アドバイザー教員 氏名	安元　佐織	所属	人間科学部 国際交流室		
研究課題名	異言語話者間のミスコミュニケーションの原因研究				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

1）研究目的

１．１　着想に至った経緯

本研究の申請者は日英バイリンガルであり、多くの異文化交流の現場でミスコミュニケーションに遭遇してきた。ミスコミュニケーションが続くと異文化交流が敬遠され、社会の流動性、多様性が侵害される可能性がある。そこで異言語話者間コミュニケーションで齟齬が起きる原因を明らかにする必要性を感じ、その状況改善のために本研究の着想に至った。

１．２　何をどこまで明らかにしようとしたか

本研究は個人の文化的背景及びコンテキストに焦点を当て、以下の主題を検証する。

主題１：個人の文化的背景はどのようにコミュニケーションに影響するのか

主題２：目標や活動を共有する過程で、個人はどのようにして文化的理解を深めるのか

本研究の最大の目的は、異言語話者間でコミュニケーションを潤滑に行うための要素を理解することである。

１．３　本研究の特色

本研究は、文化的背景の異なる研究協力者が目標や活動を共有する場として、演劇作品の上演を計画した。演劇製作の現場では一定期間の継続したコミュニケーションが求められるため、個人の異文化意識の変化に伴うコミュニケーションの変化を観察する適所である故の設定である。また、研究協力者は研究以前にほとんど面識がないため演劇創作の現場が初めての交流の場となり、そこで共通の目的を共有するというモチベーションがコミュニケーションを活性化させるのではないかと考えた。

１．４　言葉の定義

本研究において重要な幾つかの言葉をここに定義する。

コミュニケーション能力とは「きちんと相手の気持ちを慮って、自分の意思をうまく伝えられる力」である（平田、2009 p.16）。この平田（2009）の定義をもとに、本研究では「１対１コミュニケーション」を二人の間でうまく意思を伝えることとし、「ミスコミュニケーション」をうまく意思が伝わらなかったコミュニケーション、ひいてはその齟齬に気づかない場合を指す。また、「コンテキスト」はコミュニケーションに影響を与える場の状況である、と定義する。Rogers, Hart and Miike （2002）によると、E.T.ホールは異文化コミュニケーションについて、文化構造（言語、価値観）やノンバーバルな交流（お辞儀、アイコンタクトなど）が関わっている、と述べたとした。したがって、本研究では「文化的背景」を、個人の歴史によって培われたコミュニケーションの際、相手との共通項となりうる全ての要素とする。

１．５　予想された結果と意義

演劇のような共演者と関わりを持つ動機付けが強い場において、文化的背景の違いによるミスコミュニケーションは乗り越えられる障害であると考えた。またコミュニケーションは言語能力が向上せずとも共通の文化的背景の増加に伴い潤滑になると予想された。本研究の結果は、グローバリゼーションが進行し多様性が表出する現代日本において、異文化コミュニケーションに関する重要な示唆を与えると考える。

２）研究計画

２．１　概要

本研究では、異なる文化的背景を持つ4人の研究協力者に演劇の公演への参加をしてもらい、彼らの間で交わされたコミュニケーションを参与観察した。また、演劇の稽古に入る前と後に各約一時間ずつ事前、事後インタビューを行った。

２．２　研究協力者の背景

研究は当初、日本語が母語（2名）・日常会話に支障のない程度の日本語が運用できる（2名）・日本語がほぼ話せない（1名）の５名の参加者で行われる予定であったが、一人が稽古途中で降板したため以下の4人の協力者によって研究は執り行われた。

A（28）、男性。日本語が母語。国籍は日本。

K（19）、男性。母語は日本語で、英語も同程度扱える。国籍は日本。

S（23）、女性。母語はイタリア語、英語は上級、日本語は初級レベル。国籍はイタリア。

Y（20）、女性。母語は日本語で、オランダ語を同程度扱える。英語は上級レベル。国籍は日本。

３）研究方法

本研究は１．２において言及した二つの主題を中心に参与観察とインタビューを用いて考察を行った。参与観察においては役者間の稽古の休憩時間などの１対１コミュニケーションの頻度と内容の観察、その変化を観察した。インタビューは２度に分け行い、その変化を観察した。事前インタビューでは主に協力者自身の文化的、言語的アイデンティティや、異言語話者とのコミュニケーションに対する不安についてインタビューを行った。事後インタビューでは事前に質問した内容を反復し、実際に演劇体験をして感じたミスコミュニケーションなどを具体的に供述してもらった。

４）研究経過

以下は前述した実際の研究スケジュールである。この間、２週に一度程度のペースで定期的にアドバイザー教員の安元佐織先生とミーティングを重ね、進捗と予定の調整を行った。

７月　研究協力者と個別に事前インタビューを行う。少人数でのミーティングを数回行う。
８月−９月　　週一回程度の稽古を行う。参加は最大二人（柴田以外）
１０月上旬　　週二回程度の稽古を行う。１０月の第２週に台本が完成。
１０月下旬　　週３−４回稽古を行い、この段階で初めて全員が結集する。
１０月３０日-１１月１日　　演劇発表。
１１月　　研究協力者と個別に事後インタビューを行う。

５）研究成果

５．１　まとめ及び研究成果概要

本研究での主な研究成果は以下の通りである。

１：当初、コミュニケーションにおいて最も重要な文化的背景だと考えていた言語は、個人が所有する文化的背景の一側面として以上の影響を持たないことが分かった。

２：個人と相手の間に提示された文化的共通項に対する意識のレベルの差が生じた場合、ミスコミュニケーションが起こりうる。

３：文化的共通項は一度お互いに認識されるとコミュニケーションにおいて反復され、相手との関係が長期化するに従い固定化する。また共通項不在の状況も固定化し得るため、そのような状況は相手との恒常的なコミュニケーション不全をもたらす。

４：提示される文化的共通項は状況に左右される。したがって、固有の状況下で提供しやすい文化的背景をもっていることによって他者とのコミュニケーションを円滑になることがある。

これらの成果の具体的な説明及びそれを用いた主題１、２の考察を以下に記す。

５．２　主題１に関する考察

個人の文化的背景はセクシュアリティ、年齢、所属するサブカルチュアルグループなど様々な側面を持つが、当初本研究ではその側面を観察する際に、無意識のバイアスを持っていたと言わざるを得ない。これは、『異言語話者間の〜』と研究を題し、研究協力者を異言語話者という観点で選択したことからも見受けられる。前述の１は言語を文化的背景の一部として捉え直したという点で、本研究における転換点であった。この点は言語の一致が必ずしもコミュニケーションの促進につながらなかったこと、また言語という文化の一部のさらに細分化された文化的要素まで協力者が自覚的だったことによって気づいた。例えば、事前インタビューにおいてKは自身の母語を日本語だと発言した上で、学校教育が主に英語で行われていたため能力は英語のほうが優れていると話した。したがって彼は能力とは別の部分（彼の場合日本人であるという民族的なアイデンティティ）で母語を母語と認識していると言える。これをまた他の参加者の自己認識で見てみると、彼とは違った考え方を持っていることがわかる。Yは幼少期の１１年間をオランダで「通信教育と家以外で日本語を話す機会はほとんどない」状況で過ごし、日本語以外にもオランダ語、英語が堪能であるが、母語は日本語であると言う。彼女は学校教育がほとんど外国語で行われているという点ではKと共通する文化的背景を持っていたが、能力的にも彼女は日本語が一番得意であるとインタビュー以前の調査票に記した。実際にインタビューで一番得意な言語は何かと聞いたところ、「感情表現なら日本語、物事をズバッと言いたい時は英語かオランダ語」だと語った。すなわち、彼女も能力的な側面で母語を判断しているわけではないが、その判断の基準がKとは異なっている。彼らは日本語を母語としてコミュニケーションに活用していながら、運用する際の自覚が大きく異なり、またそれによってお互い、

及び他の協力者との長期的なコミュニケーションも異なった。この点は二人が個人として行ったＡとの１対１コミュニケーションを観察することで見えるものである。Ａは本研究において演劇経験の最も豊富な一人であり、その文化的背景は演劇制作の現場で表出しやすいものだ。同じく演劇経験が比較的多いＫとＡは演劇の話題を強固な文化的共通項として関係を構築した。しかし、同様に演劇経験者であったＹはＡと「共通の話題がなかった」と言い、Ａも同様の発言をしている。Ａはその他に、Ｙの演劇に対する姿勢を疑問視する発言をしているため、Ｋと同じ演劇という共通項において、見解の相違がより顕著に現れたのだと考えられる。Ａはコンテキストによって双方との共通項を必然的に決定させられ、またその選択された共通項がコミュニケーションにおいて頻出したため、双方において異なる結果に終わったと言える。ここでは、前述の３と４に関する考察が内包されている。

５．３　主題２に関する考察

個人の文化的理解が深まったか否かに、本研究においては疑問が残る。事後インタビューにおいて４人の研究協力者は全員自分の他文化に対する接し方や考え方に違いはなかったと答えた。これは研究の期間が当初予定されていたより短縮されたことも一因だが、上記２において言及した意識レベルの差は大きな影響と考えられる。意識のレベルの差とは、個人が共通項となっている文化的背景に対する自覚の程度を指す。自覚は、その文化的背景がその個人にとって自明性の高いものと考えられているほど低くなる傾向にある。ここでは研究におけるＫとＳの言語に関する意識のレベルの差を参照する。Ｋは前述の通り、日本語を最も得意な言語ではないが母語だと考えている。対照的に、Ｓにとって日本語は第２外国語であり、大学生になってから習得した最も苦手な言語だと考えている。二人の日本語運用能力の差は明らかであるが、それ以上に日本語を使ってコミュニケーションをとる際の意識のレベルに大きな差があり、それが顕著に現れるのは１対１コミュニケーションにおいて彼らが間違いを指摘された際の反応の違いである。とある瑣末な文法的間違いを指摘された際、Ｋは特別リアクションを取らずにそのまま指摘された箇所を言い直した。同じような間違いを指摘されたＳは２度同じ箇所の訂正を聞き返し、何度か繰り返したのち、自分の日本語能力の無さを詫びた。Ｋのように意識のレベルが低ければ、同じ間違いを繰り返したとしても、それが彼自身の印象に残る可能性はＳの場合より少ないだろう。同じように、本研究の参加者たちは自分の文化的背景、ひいては言語や演劇経験など、コンテキストによって引き出され、有意な差がある一部の文化的背景以外の側面において、意識レベルが低かったのではないかと考えられる。演劇制作の場で例えば食文化の差は表出しにくく、表出しない文化は共通項とならないため、摩擦を生むこともない。このように特定のコンテキストにおいては特定の文化的背景の側面が強調されるため、その部分に関する反発や理解しか生まれないのではないか、というのが最終的な結論である。

６）引用文献

1. 平田オリザ、蓮行（2009）コミュニケーション力と演劇　コミュニケーション力を引き出す　演劇ワークショップのすすめPHP新書
2. Pusch, Margaret D. ″Intercultural training in historical perspective.″ *Handbook of intercultural training* 3 (2004): 13-36.